

アミノ酸比率法を活用した銘柄豚収益性向上技術の検討（第2報）

石川真優

畜産研究センター

【目的】近年、飼料中のリジン/粗タンパク質(Lys/CP)比を低く抑えることで発育性を低下させず、脂肪交雑を高めるとされるアミノ酸比率法が確立され、愛媛甘とろ豚（甘とろ豚）生産においてもアミノ酸比率法を用いることで脂肪交雑を維持したまま、発育が向上することを確認した（令和5年度発表）。しかし、アミノ酸比率法では飼料中のCP含量を高くするため、付随して飼料価格も高価になることから、本報では、甘とろ豚生産に適したLys/CP比を検討した。

【方法】供試豚は、当センターで生産したLWY種27頭を給与飼料によって3区に振り分け、試験期間は令和6年10月～令和7年1月（15頭）、令和7年9月～12月（12頭）の2期とした。各区の飼料は、対照区（CP14.0%、Lys0.48%、Lys/CP比0.034）、試験区1（CP12.0%、Lys0.44%、Lys/CP比0.037）、試験区2（CP13.0%、Lys0.48%、Lys/CP比0.037）とした。各飼料は平均体重約60kgから出荷まで（体重約110kg）給与し、発育成績、枝肉成績および肉質成績を調査した。

【結果】発育成績および枝肉成績において、各試験区間で有意な差は認められなかったが、一日平均増体量は試験区2（0.82kg/日）、試験区1（0.76kg/日）、対照区（0.72kg/日）の順で良好であった。試験期間中の総飼料摂取量と総増体量より算出した各区の飼料要求率は、対照区で3.89、試験区1で3.59、試験区2で3.42となった。各区の飼料要求率から試算した専用飼料給与期間中の1頭あたり飼料費は、対照区と比較し、試験区1で8.8%減（△1,650円）、試験区2で12.6%減（△2,350円）となった。

【結論】近畿大学が作成した「豚肉における脂肪交雑向上のための飼料技術のガイドライン」では、中Lys/高CP（0.56/16.9）比0.033を推奨値としているが、甘とろ豚生産においては、低Lys/中CP（0.48/13.0）比0.037でも良好な発育が得られ、飼料コスト面での優位性も示された。今後、肉質成績の結果も踏まえた上で、甘とろ豚専用飼料の改定に着手する。

種畜：豚、分類：畜産技術、キーワード：アミノ酸比率法